

柳宗悦と民藝運動の周辺 (二)

——「見る」ということ——

松 田 伸 子

1

関東大震災から程ない大正十三年（一九二四年）正月九日、柳宗悦は、彼の友人でありまた朝鮮美術の在野の研究家でもある浅川巧に誘われ「思ひついたまゝ」に出た甲州の旅にあった。一つには、ある人の所蔵する「朝鮮の陶磁器を見に行く為」、そしてまた一つには、「八ヶ岳、駒ヶ岳の冬の自然が見たく日野春あたりを散策したいのが望み」で出かけた旅だった。^(一) また、その頃何か知らぬ心を惹かれ始めていた「民衆的な作品」、すなわち「地方的な郷土的な民間的なもの、自然の中から湧き上がる作為なき製品」を、その旅先で購うことができるかもしれないという楽しみもあった。^(二)

その日の朝早く、焼物を見せてもらうため赴いたある家での出来事だった。「二体の仏が暗い光を斜めから受けて、庫の前に置かれてあつた。」そして、その前を通り過ぎようとする時、柳がふと投げ掛けた一瞥は「思ひがけなくも微笑む彼等に迎へられた。」^(三) その刹那、「心は既にその中に捕へられて」しまっていたという。^(四) それまで世に顧みられることのないまま百余年の歳月を経てきた木喰仏と、柳宗悦との出会いである。

柳が常に温め続けてきた美しいものへの憧れと、宗教哲学者として自ら負う使命感とを結びつけることとなるこの出会いは、通りすがりの、しかし、柳にとっては「時が満ち」、「当然現はるべきものが現はるゝに至つた」^(五)としか思ひようのないものだった。

二体の仏は、木喰上人のふるった伸びやかな刀の跡も鮮やかな地蔵菩薩と無量寿如来であった。そして、その二体のうち、地蔵菩薩がまもなく柳に託されることになる。柳と木喰仏との出会いを目の当たりにして、そのただならぬ様子に心打たれた持ち主、小宮山清三は、彼自身我を忘れてそうせざるを得なかったようである。「一体をお送りしませう」との申し出は、それから一週間後の一月十六日には早くも実現し、柳は甲州でひととき垣間見た不思議な世界を、大震災の爪跡も癒えぬままの東京で今再び確認していた。^(六)彼自身、長兄を大震災で失い、家も破損し、この三ヶ月後には京都への転居を余儀なくされようとしていた時であった。^(七)

・・・「地蔵菩薩」は菰に包まれて私の手許に届きました。私は冬の旅から帰つて後、風邪を引き、床に就いてゐたのです。私は枕辺にそれを置いてもらひました。眺め入るや私は病苦も忘れて、又も微笑みに誘はれたのです。(誰かその微笑に逆らふことが出来るでせう!) 再びその不可思議な仏は私の心を全く捕へました。私はそれに見入り見入り見入りました。・・・

それから毎日毎晩、私はその仏と一緒に暮らしました。何度その顔に眺め入つたことか。私の部屋に入る凡て人も、それを眺めずに帰ることは許されませんでした。見るものは誰も微笑みに誘はれてくれるのです。不思議な世界が、漸次濃く私の前に現れてきました。^(八)



木 喰 上 人 作 地 藏 善 薩

この時からおよそ二年後の大正十四年（一九二五年）の暮れ、柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司の三人によって初めて「民藝」の語を与えられることになる一つの美の世界の、その究極の相を、柳はこの時すではっきりと見届けていたのである。柳が民藝運動を通じて語り、示し、共に分かち合いたいと願いつけた美しい暮らしのヴィジョンとは、微笑みに満たされた別世界を垣間見るこの体験を抜きにしては決して語ることの出来ぬものである。民藝運動の核はここにあるとさえ言ってもよい。

2

日本民藝館の開館という柳の大きな夢が、創案からおよそ十年もの歳月を経て、ようやく実現しようとしていた昭和十一年（一九三六年）、後の一連をなす茶道改革論の原点となる『茶道を想ふ』^(九)が刊行された。その冒頭は次の衝撃的な一節であった。

彼等は見たのである。何事よりも先ず見たのである。見得たのである。凡ての不思議は此の泉から湧き出る。

誰だとして物を見てはゐる。だが凡ての者は同じようには見ない。それ故同じ物を見てゐない。・・・見ても見誤れば見ないにも等しい。誰も物を見るときは云ふ。だが真に物を見得る人がどれだけあろうか。其の少い中に初期の茶人たちが浮ぶ。彼等は見たのである。見得たのである。見届けてゐる故に彼等の見た物からは真理が光る。^(十)

一冊の本の冒頭に、先ず何を描いてもこの一節を書かねばならなかったことが明かに示すとおり、民藝運動の総ての

出発点は「見る」ことだった。実に「凡ての不思議は此の泉から湧き出る」のである。あの甲州の旅での二体の木喰仏との出会いを、今一度思い出して欲しい。それまで土地の人々の目には触れながら、誰も「見る」ことなく、薄暗がり沈んでいた仏たちを、柳はその時「見た」のである。「見得た」のである。そして、「見届けてゐる故に」彼の「見た物からは真理が光」ったのである。病床にあって地藏菩薩が届けられた時、彼はまたもその仏に眺め入るや、逆らい得ないその微笑みに誘われ、それに「見入り見入り見入」ったのである。大震災後の自分自身が置かれていた厳しい状況も、その時の病気も、皆問題ではなくなる世界に「見入」ったのである。

この「見る」ということについて、同じく『茶道を想ふ』の中の柳の言葉をいまま少し追ってみたいと思う。

どう見たのか。ぢかに見たのである。「ぢかに」ということが他の見方とは違ふ。ぢかに物が眼に映れば素晴らしいのである。大方の人は何かを通して眺めて了ふ。いつも眼と物との間に一物を入れる。或者は思想を入れ、或者は嗜好を交え、或者は習慣で眺める。それ等も一つの見方ではある。だが、ぢかに見るのとはまるで違ふ。ぢかにとは眼と物との直接的な交はりを云ふ。直下に見ずば物其ものには触れ難い。^(十二)

この「ぢかに見る」ということは、彼のほとんど凡ての著作を通じて、表現こそ微妙に異なれ極めて頻繁に繰り返されている。日常において、人は自分を取り囲む世界を常に理解していたい、知によって把握して見たいと願う。「何かを通して眺める」とはそれを意味すると言ってよいだろう。「思想」や「嗜好」や「習慣」を似て見るとは、ある立場に自らを置いて見ることとも言える。それは、人にひとときの安心をもたらしてくれるものである。世界のある立場

を取ることによつて対象化し、一つの安全な枠の中に押え込むことで、本来決して自律的ではありえない不安定極まりない自らの存在を、ひと時確かなものとして感じるができるからである。しかしそれは同時に、自分と世界とを隔てることであり、手にした安全の代わりに、人は世界との本源的な関わりを喪失する。理性的な自我が確保された安心の代償として、人は文字どおり「我を忘れる」ような鮮烈な体験からは遠ざかつてゆくのである。

この「ぢかに見る」ということの意味を、柳はさらに次のように掘り下げてゆく。

さらば何をまともに見たのであるか、見る時何が見えたのであるか。内なるものが映るのである。或はものゝ真体が見えると云つてもいゝ。あの哲学者達が、「全き相」と呼びなしたものである。物の一部を見るのではなく、物其のものを見るのである。全きものは部分の総和ではない。「加」と「全」とは違ふ。……ぢかに見るとは、考へるよりも前に見る謂である。考へで見れば局部より見えはしない。見るより前に知を差入れる者は、乏しい理解に止つて了ふ。見る力は知る力よりも多くを識る。^(上)

全体を見るとは、その混沌とした得体の知れなさを敢えてそのまま引き受けることである。一方、ある部分に焦点を絞つてそれを詳細に見る時、その部分を遥かに明瞭に把握し得るといふことが言えるかもしれない。しかし、それはあくまでも便宜上のことでしかない。なぜなら、ある部分が全体から切り取られることによつて、全体との関係という、その部分に内包された本質そのものが既に本来のものとは違つてしまうからである。部分部分を「加え」、再び全てを合わせてみたところで本来の「全」にはどうしても戻すことが出来ない理由がここにある。そして、柳が「ぢかに見る」ことによつて見届けようとする世界と、我々が普段目にしている日常の世界との次元の違いもまたここから

生まれる。

このことについて、柳は自らの考えをさらに具体的に示すため、「活きた花」の美しさということを繰り返し説いた。かなり初期から晩年に至るまで、柳はこの比喩を好んで用いているが、その一例として、昭和十五年（一九四〇年）の一文を紹介したいと思う。

試みに一つの花を手にとらう。私達は活きたその花を分析して、花弁や雄蕊や雌蕊や、花粉やその他に分けて標本に作ることは出来る。だが、一旦分けたそれ等のものを、繋いだとて、もとの活きた花にはならぬ。・・・死ぬだものは活きたものに甦つては来ない。それと同じことである。見る働きを知る働きへ移すことは出来る。併し知ることから見ることを導き出すわけにはゆかぬ。だから美学の基礎は概念であつてはならぬ。^(一三)

名も定かではない道端の花を思うとよい。たとえば、散歩の道すがらにでもふとそれに目を止めた時、〈我を忘れる〉
としか言いようのない体験に誘い込まれた覚えが誰にでもあるはずだ。柳の言葉で言えば、「心が花の美に打たれる刹
那、花に就いての反省があるのではない。花そのものがあるのである。」^(一四)ただそれだけなのである。その体験が鮮烈に
残っているがゆえに、後になってなんとかその花の名を知りたいと思うであろうし、またその花の素性についても尽
きぬ興味を抱くものである。そんな風に、見た後それに導かれて「知ること」は、「見ること」をより豊かにこそすれ、
初めの感動を曇らせるものでは決してない。

部分部分に一たび分けてしまった花は、再びその本来の活きた美しさを取り戻すことが出来ぬばかりではない。一旦知った後には、それを見る人間の側に驚きの入り込む余地が極めて少なくなってしまうという問題もある。それが、

改めて「見る」ことを難しくしてしまうもう一つの原因となるのである。

見る心と驚く心とは性質が近い。ものへの驚嘆がある時、受容れる力は大きい。見入るのは感じ入るからだとも云へる。驚きが起こらずば、見る機縁は来ない。冷かさは、知る心には結びつくが、見る心には結びつかない。驚きは強い印象とも云へる。それは、鮮やかな活々とした感じである。眠れる直観はない。

・ ・ ・ 知る前に見得ないものに、美しさはその姿を現さない。見る者は彼の直観に於て美しい世界を絶えず生んでゆく。^(二五)

木喰仏と柳との出会いは、一つにはそれが全く予期されぬものであったことが大きな幸いとなって実現したと言つてよいだろう。「空手になればなるほど豊かな贈物を受ける」^(二六)との柳の言葉通り、「見るより前に知を差入れる」暇もないまま、全くの「空手」であったことが、彼を驚かせ、迷いなく「ぢかに見る」ことを可能にしたのである。そして現実に彼の「直観に於て美しい世界」が生み出されたのである。

3

如何に今の世には「物」をぢかに見てくれる人が少いことか。誰だとして眼で眺めはするが、内に観入る力を有つた人が少い。^(一七)

「ぢかに見」る見方だけが、日常の理性の壁を突き抜け、「知る力だけでは近づくことが出来ない」^(一八)世界に入つてゆく

ことを可能にする。この「ぢかに見る」ことが生み出す「内に観入る力」とは、別世界を看破する力と言ってよいだろう。

見る力は内に入つてゆくが、知ることは周囲を廻ることに過ぎない。美への理解には分別より以前に働く直観の力がなければならぬ。本質的なものによく触れ得るのは直観であつて理知ではない。かかる意味で見る力は、知る力よりも、もつと本當の理解を有つてゐるとも云へる。説くことが出来なくとも、真理に通ふものが更に多い。^(十九)

「見る力」と「知る力」の決定的な違いは、既に紹介した「全きものは部分の総和ではない」という主張の中でも重要な意味を持つていた。そして、ここでもやはり、やすやすと「内に入つてゆく」ことの出来る「見る力」に対して、「知る力」は、術もなく「周囲を廻る」ばかりで、終に真理への突破口を見出し得ない無力なものとして痛烈な批判を受けている。「真理はいつも真近くに寄り添う。」^(二十)しかし、それは普段には見えない。すぐそこに在りながら、次元を突き破る力なくしては、それは全く見えてはこないのである。

ちなみに、柳は、この「真近くに寄り添う」真理を見届けられぬ状況を、歴史的に見て極めて今日的なものとして位置づけている。

大体近世に於て私達が喪失した才能のうち、最も著しいものは直観力ではないだらうか。特に物の美を観る力ではないだらうか。近世の才能は知識に集注したかの観がある。故に抽象的な「事」を知る人は多いが、具体的な「物」を観得る人が少ない。^(二十一)

知識を頼み過ぎるようになった我々は、「直観力」、すなわち「内に入つてゆく」力を失つたのだという。殊に、「物の美」に関して。しかも、我々は自らの直観を鈍らせてしまつたばかりではない。なお厄介なことに、それは客観性を欠いた、それゆえ知識よりも一段低い不確実な力であるとして、それを蔑むことを覚えたのである。その状況の根底には、言うまでもなく、主観と客観を峻別する近代の二元的な世界像とそこに生じる主観と直観との混同がある。柳はそういった状況に対して異議を唱え、次のように直観を弁護するのである。

普通直観と云ふと何か頼りない主観的なものゝやうに受け取る人があるが、主観に墮するのは何か偏見で不純にされてゐる場合に過ぎない。直観には、まだ主観客観の別はない。それだから直かに見得るのである。直観とはありのまゝに受け取ることを云ふのである。⁽¹¹⁾

手仕事を蝕む機械化や資本主義も、もちろん柳にとって近代には違いなかつた。しかし、彼の目がいつも究極的にたどり着くところは、そういった現象面ではなく、近代が拠つて立つ二元的な世界観そのものであった。「哲学と云ふとデカルト以後と思つてゐる」近代に対して、彼は『デカルト以前』と云ふ声はきつと放たれるであらう」と叫ばずにはいられなかつた。しかも、その言葉が、昭和八年、民藝運動が最も精力的に推し進められていた時期に語られていることも見逃すわけにはゆかない。この頃の柳は、もはや白樺時代のように、「哲学」という言葉を不用意に振り回す柳ではなかつたのである。

ともあれ、直観が自由に働き得ないならば、「真理は真近くに寄り添う」のに、我々はそれを見ることができない。「物の美」に関して言えば、美しいものが真近くに寄り添うのに我々はそれをむぎむぎと見逃してしまつている。そ

れゆえに、本当は美しい世界が、我々の眼にはそうは映らぬというわけである。もっと後の表現である「美の浄土」というものについても、柳はやはり、それは「遠方の国」のではなく、「現下の浄土」であることを重ねて強調している。「穢土を心から厭離する時」、その穢土そのものが「一転して浄土と即結」するのであり「穢土が現実の事実である限り、浄土もまた現下の場」であると柳は言っている。人が世界と向き合う時、それをいかなる枠組みにも組込むことなく「ありのまゝに受取る」ことができれば、そのままその場に普段とは全く相貌を異にした世界が立ち現れるのである。

直観の前に凡ての匿れたものは彼の被ひを解くのである。直観には常に見出しがある。開拓がある。直観は世界を美しくする。^(二五)

ここでは、「内に入つてゆく」という表現こそ用いられてはいないものの、やはり直観について全く同じことが語られている。日常の知の次元を直観が突き破った時、そこには全くの別世界が開けている。ここでは、世界がその有りのままの姿を横たえ、美しい物はその本来の美しさをのびのびと現すのである。

「眼の業は時間を有たない」と柳は言う。^(二六)つまり、見方が「内に入つてゆく」力を持つためには、逡巡は許されぬことを言うのである。ためらった瞬間、既に「内へ入つてゆく」契機は失せている。それは、永久に「周囲を廻る」ことの始まりと言つてもよい。

観るのは一瞬でいゝ。一瞬の方がいゝ。印象は最初の鮮やかなものほど慥かである。直観には時間の経過は別に要らない。……何か迷ひがあつたり躊躇らつたりしては、既に見る資格を欠いて了ふ。見る前に何か偏見があつてはいけない。(二七)

ためらいも、知識も、先入観も介入する余地のない一瞬。見る者は不用意で、自分自身のありのままが完全にさらけ出され、その一瞬に集約される。そんな一瞬だけが、日常の壁を突き破ってへこちら側へからへあちら側へと我々を抜け出させてくれる力を持つ。そして、このような力を秘めた一瞬の「直観に躊躇はないから疑惑が起らぬ。だから信念を伴ふ」^(二八)のである。「ものゝ真体が映れば信念を誘ふ」^(二九)のは、しごく当然の理と言わざるを得まい。

言うまでもなく、柳が木喰仏の背後に隠された「不思議な世界」を看破し得たのも、やはりそんな一瞬のなせるわざであった。そして、以後柳の仕事を支える「信念」の泉もまたここに発する。この世の利害、この世の煩い。そういったものを越えさせてくれる力は、この世とは全く別の境界に湧き出る「信念」を惜いて外にはないだろう。

ファシズムは、柳の民藝運動の前半、すなわちそれが最も精力的に繰り広げられた時期にその影を色濃く落としていた。思想統制の揚げ句、太平洋戦争の悲惨に至つた時代の中で、柳がその世相に巻き込まれることなく、自らの独自の道をさりげなく歩き続けることができたのも、この別世界に湧き出る信念の泉なしでは有り得なかつたはずである。

4

初期の茶人たち、すなわち室町時代後期の茶人たちの物を「見る」力に驚嘆し、その力の秘密が「ちかに見る」こ

とにあると説いてそれを自らの美論の礎に据えた柳であった。しかし、彼を驚嘆させた茶人達の「見る」力は、鑑賞の域に留まるものではなかった。実のところ、柳が彼らに真の共鳴を覚えた理由は、彼らの「見る」力というものが、生活から遊離した単なる鑑賞に終らず、一日一日を生きてゆくという人の根本的な営みの中にその拡がりを持っていることであつた。

柳は、初期の茶人達の「見る」力の拡がりについて、次のように賛辞を尽くしている。

只見ることでだけでは見尽くしたとは云へぬ。彼等は進んで用ゐたのである。用ゐないわけには行かなかつたのである。用ゐたが故に尚も見得たのである。用ゐずば見ることが無いとも云へる。なぜならよく用ゐられる時ほど物の美しさが冴える時は無いからである。それ故用ゐることで彼等は尚も厚く美の密意に触れた。よく見たくば、よく用ゐねばならぬ。美を只眼で見、頭で考へるより、進んで体で受けた。言ひ得るなら行ひで見たと、さう云はう。(三〇)

これは、もはや茶人への共感などというものを通り越した一節と言わずばなるまい。「よく用ゐられる時ほど物の美しさが冴える時は無い」と言う柳は、自分自身が美しい物との暮らしの中で見いだした切実な真実を、我知らず語り始めているのである。美を「進んで体で受け」ること、あるいは「行いで見」ること。柳にとって「見る」ことは、そこまで熟してゆかねば、真に「見る」ことは成り得なかつた。木喰仏と出会つた時にも、柳はただそれを目で見ただけではなかつたことを思い出して欲しい。「それから毎日毎晩、私はその仏と一緒に暮らしました」と彼は言うのである。まさに、「進んで体で受け」、「行いで見た」のである。

ともあれ、「用ゐること」が厚く「美の密意」に触れることの鍵であるとする民藝運動の實際を支えた主張は、この

ように、「見る」ことの一つの拡がりとして捉えられねばならない。今一度、茶人の例を借りて展開する柳の主張に戻ってみよう。

彼等が「茶」を観じたのは、遼遠な美に於てはなく、現実^ニに即した美に於てある。考へる美よりも交わる美にもつと切実な愛を感じた。観念に於てではなく生活に於て、更に深く美を見つめた。・・・かくて美と生活を固く一つに結んだ。^(三二)

この「美と生活とを固く一つに結」ぶことを尊ばねばならないという主張は、柳の生涯を通じて、繰り返し繰り返され続けた。ここで用いられた「交わる美」、「現実^ニに即した美」というような表現も、もちろん同じことを説いていることは変わりはない。しかし、また別の一文でも、自分は「美と生活とを結ぶことを努めたい」と言うように、柳は、「美と生活」という表現に、自らの美へのこだわりを的確に活かす道を見いだしたようである。

その背景には、近代化が日本にもたらした生活風景の荒廃という否み難い現実がある。ことに、柳が青年時代を過ごした大正とは、今日の大量消費社会の原型が形成されつつあった、近代日本の歴史の中で一つの大きな転換期であった。

工業地帯が生まれる。サラリーマンたちが今日とほとんど変わらぬいで立ちで群れとなって仕事に向かうラッシュアワーというものが出現する。巨大消費都市は、急速に普及した人工の光に隅々まで照らされて夜も昼もなく営まれてゆく。物は、新しく登場した宣伝システムで広く人々に紹介され、大規模な流通機構に乗って分配されてゆく。街には目になじまない看板が立てられてゆく。買い手も売り手も作り手も、互いに知らぬ者同士の、相互の誠意など通

う苦のないデパートという大量消費の殿堂が登場する。こんな現実を目の当たりにして柳は何を思っただろうか。

無数に醜いものが周囲に群るのを眺めて、私はどうしたらいいのかを想ひ惑ふ。町に出れば店々に並ぶものが入る。行き交う街頭の人々が何を着、何を持つか、明らかである。家を訪ねれば、どんな調度や什器が用ゐられるかよく分かる。杉大な百貨店に足を入れれば、ありとあらゆるものが繰り広げられる。だがそれ等の無数のものから、どれだけ正しいものを選び出すことが出来るか。一割はおろか、一分もむづかしいのではあるまいか。……どうしてこゝ迄ものがひどくなつて来たのか。……何か救いの道が見いだされぬだらうか。果して望みがあるだらうか。^(三三)

このような、毎日の暮らしが醜い物の中で過ぎてゆく状況そのものが柳を深く悲しませていたことはもちろんである。しかしながら、柳を心底いらだたせ、居ても立っても居られぬ気持ちに駆り立てていたのは、一方で、美の問題が美術の隆盛という形で生活から離れたところで時代を席卷し、もう一方で、ありきたりの暮らしが美とは無縁のものになつてゐるといふ倒錯した状況だった。

近代程美術展覧會の沢山ある時代は一寸歴史的に類例がないと思ひますが、そのくせ時代は美的に深まつてゐません。……美が生活に触れてゆかないからです。家庭に入つて行かないからです。……私の考へでは一つの美学書に詳しくなるより、一つの着物、一つの茶碗を正しく選べるだけの力を養ふ方が、遥か本質的な結果を人生に及ぼすと思ふのです。^(三四)

ここで柳の言う、美が「家庭に入つて行かない」という意味の深さを見逃してはなるまい。いかなる問題であれ、それが「家庭」、すなわち人の営みの最も本質的な部分と交わりのない段階では、それはそれ、これはこれという妙なけじめを容易につけてしまえるのが人間である。逆に言えば、いかなる問題も、「家庭に入つて」こない段階に留め置けば、時にその人の人生さえも変え兼ねぬような関り方に巻き込まれる恐れはない。しかし、柳の天性はそういつたけじめをどうしても許さなかった。公ではいわゆる学者らしく問題を対象化して論じ、私では世の大勢に逆らわず澄ましているということが柳にはできなかった。そうは出来ない切実な思いが、いつも理性を超えて柳を捕らえていた。二十代半ばの宗教哲学を論じていた頃から、「内心の切実な要求に基く事によつて、学究の冷たさから救はれた」ことを誇りに思い、「哲学の学者」としてではなく、「哲学者」としてしか生きては行けない人だった。そして、五十代にさしかかる頃にもまた、「哲学者とは宇宙なり人生なりの『事実』をまともに洞察する人」であり、また「それ等の『具体的事実』への深い理解者」であり、「自然や人間を活けるものとして見つめることを忘れない」者なのだ(三三〇)と、変わらぬ自らの立場を表明せずにはいられぬような人だった。そんな柳が、美しい物を前にした時、それを冷やかに論じることなどできるはずもなかった。

健やかな美しさは、用ゐてくれといつも呼びかけてくる。使はないでおくには余りに美しい。見る眼は用ゐる手を促さないわけにはゆかぬ。(三七七)

それはまさに柳の実感であろう。実際、柳の暮らしの有り様は、「ものへの愛は、日々の暮らしに根をおろさねばなら

ない」^(三八)という言葉をもそのまま実行したものだ。例え、幾度も移った柳の住まいを見てきた濱田庄司は興味深い証言をしている。柳のすまいは「借家でもう玄関で勝負がついてゐた。そして、そのことは、少しも緩めず、台所の裏へ抜けるまで一貫してゐた」という。また同じく濱田の証言によれば、病氣入院の折にも、「病院の一室で好きな調度を取寄せ気がすむまで指図し」、揚げ句の果てに「それを拒む病院からは遂に退院してしまつた」のだ。そうだ。^(三九)

柳は、美しい物からの抗い難い誘いに導かれて、それらを用い、「生活に美が即して来る」までに、「美が身にしみてくる」^(四〇)までに、美の問題を自分の生の最深部に抱き込んだのである。逆に言えば、そこまで徹底してしまわねば、柳にとって、自らの美に関する恵まれた天性は迷いでこそあれ、決して救いとはなりえなかつたのだと思う。

私は私の生活で美と用との関係が如何に重要だかを語りたい。之は千万の言葉よりも、もつと雄弁に美をもの語るであらうと思ふ。私は私の生涯を通じて、生活を離れての美への理解は無理なのだと思ふ^(四一)ことを示したい。

この立場を自らの内で確認し、同時に公言することによつてのみ、柳には、自分がこの世で為し得る事、進み得る道を見定めることが出来たのだと思う。

ここで、柳の言う「用ある」ということの意味をもう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

普通に我々が何かを（用いる）と言う時、用いる自分があり、その自分に用いられる物があると考えるだろう。本来人間が機械を使うべきであるのに、逆に人間が機械に使われている——こんなことが、今日盛んに言われる。そし

て、人間が真に人間としての幸福を求めるならば、この状況を逆転させねばならない。しかし、この至極尤に思えるような人間尊重の意見の中すら、実は重大な、根本的な誤りがありはしまいかと思う。柳の言葉を注意深く追ってゆくとそんな疑問が沸き上がってくるのである。柳のそんな言葉の一つを紹介しておこう。

用ゐるにつれて器の美は日増しに育ってくる。用ゐられずば、器はその意味を失ひ又美をも失ふ。其美は愛用する者への感謝のしるしである。「手づれ」とか、「使ひこみ」とか、之が如何に器を美しくしたであらう。・・・器の助けなくば人が生き得ない如く、人の愛なくば器も亦生き得ない。人は器を育てる母である。器はその愛の懐に活きる。用ゐられて美しく、美しくして愛せられ、愛されて更に用ゐられる。人と器と、そこには終りなき交りがある。あたためられつゝ、共々に此日を送る。^(四二)

一つの場を共有してこの世に存在する人と物との間に一線を画し、どちらかが主でどちらかが従と考えることがすでに、人の暮らしというものの本質を見誤った前提ではないのか。柳の言葉はそんな問いを突き付けてくるように思われる。

自分の暮らしのこまごまとした必要や、好みを満たしてくれる物の数々を、人は一方的に使っているのでは決してない。例えば人は、物と慣れ親しむにつれ愛着を深めたり、共感を覚えたり、あるいはそれらがもつと美しくはなれぬかと工夫をこらしてみたりもしよう。また、物は物で、折節の風情を暮らしの中にもたらしてくれたたり、あるいは月日を経て、圭角がとれ風格を得た物の美しさは暮らしにかけがえのない落ち着きを与えてくれたりもする。人と物とは暮らしの中で密に関り合いながら互いを育て合つてゆく。広くは、人、物、風景、気候など、ありとあらゆるも

のを含めて、人は環境との相互の関りの中で初めて本当の意味で生きてゆけるとも言うことができるだろう。人と環境とは双方がその在り方の生起を互いに促し合うものであろう。

「吾々の家は美術館ではいけない」と柳は言う。^(四三)ある物を、離れてただ眺めるのではなく、暮らしの中で「用ゐる」ということ。それはすなわち、その物がこの広漠とした世界にただ冷やかな物として在ることから救い出し、それが根つき育つことができるような確かな場を与えることである。そして、その存在を自分にとってかけがえのない唯一無二のものにしてゆくことである。暮らしがそこまで深まった時、それはすでに、自分のアイデンティティ発見の場にまで深まっているとも言えるだろう。柳は言う。「品物が美しければ美しいほど、それを見たり持ったりする自分も、同じ様にそれ等の品々にあやか」って、「心の美しい人間になり得たらばと思はれる」と。^(四四)日々の暮らしに自己を見いだすことが出来ないとしたら、人はいつたいてどこでどうして自己を発見することができるのか——柳の静かな言葉の中には、実はこんな厳しい詰問が含まれているような気がしてならない。

人間の主体性ということ、近代の理念に染まりすぎた我々はあまりに鵜呑みにしているところがありはしまいかと思う。観念としてわりきれば、それもよからう。だが、それは一人の人間が毎日を生きてゆくという現実とはどうして相容れそうもない。人間の本質というものは、人間を毎日の暮らしの中に帰さねば見えてはこないものである。柳はある時、「物買ツテクル、自分買ツテクル」という河井寛次郎の句にいたく感心し、それをさまざまに膨らませて一文を書いた。

品物を愛するのは、そこに第二の自分があるためとも云へる。・・・又考へやうに依つては、そこに自分の住む故

郷、やすらひの場所を見出してゐるのだとも云へる。・・・物を買ふのは、自分以外のものを買つてくるわけではない。又物を集めるのは、自分の一家一族と暮らす意味にもなる。一番なごやかに心が清く、親しく暮らせるその暮らしに入る事である。(四五)

柳は、河井の句が真理をついた名句たる所以をこう説明する。そして、これに啓発されて柳の考えはさらに膨らんでゆく。

私は次のやうなことをも又気づいた。「私が物を買ひ集める」といふが、寧ろ「物が私を買ふ」のだと。私が物を招き寄せるのではなくして、物が私を招いてくれるのだと。私が物を求める時と、物が私を求めるとは同時なのだ。(四六)

〈自分とは何者であるのか〉という問いは、たぶん人間にとって普遍のものだろう。その問いを内へ内へと問い詰めてゆく時、人は、いわゆる西洋近代的な意味での自己というものに出会う。少なくとも出会える筈だと考えている。しかし、柳の場合には、それとは全く逆の方向にその問いは向けられている。彼は外に外にと自分を解き放ち、暮らしの在り方と自己の在り方を一つにしてゆくとともに、自己を明らかに知る機縁を見い出そうとしているのである。自己を知る機縁が、自分を取り囲み日々を共に過ごしてくれるさまざまな物との関りにあるということを見抜き、それを常に意識していた柳。そんな彼にとって、家の中には安易な利便から醜い物が満ち溢れ、さらにその家を取り囲んで広がる風景も目を覆うようなものであるような状況をどうして受け入れることができただろう。柳にとって、

暮らしが醜いということは、自分自身の存在の危機に外ならなかったはずである。柳には、どうあっても日々の暮らしを美しくしてゆかねばならない切実な訳があったのである。「美と生活とを結ぶ」という民藝運動のスローガンは、これまで述べてきたような柳の世界観、人間観を抜きにしては語れぬものであろう。

ともあれ、柳の民藝運動の最も具体的なスローガンであった「美と生活とを結ぶ」ということも、やはり、「見る眼」に促される「用ゐる手」を素直に差し出すことから生まれ出てくるもの、すなわち、「見ること」の拡がりの一つの重要な展開であった。

〈注〉

- (一) 柳宗悦「上人発見の縁起に就て」、『木喰五行上人略伝』（木喰五行研究会、大正十四年八月）、『柳宗悦全集』第七卷（筑摩書房、昭和十六年）、二五八頁。なお、『柳宗悦全集』からの引用は以後『全集』及び巻数のみを記すこととする。また柳の文章には改めて執筆者名は記さない。
- (二) 同上、二五七頁。
- (三) 「木喰上人略伝」、『木喰五行上人の研究』（木喰五行研究会、大正十四年）、『全集』七、七頁。
- (四) 「上人発見の縁起に就て」、『全集』七、二五八頁。
- (五) 同上、二五六頁。
- (六) 同上、二五九頁。
- (七) 水尾比呂志「柳宗悦年譜」、『柳宗悦』（日本民俗文化大系）（講談社、昭和五三年）等参照。なお柳宗悦の長男柳宗理氏の記憶によれば、家の破損は主に石垣などで、生活の主要な部分に支障はなかったようである。京都への転居は、主に東京の都市機能の麻痺によって決意されたものようである。
- (八) 「上人発見の縁起に就て」、『全集』七、二五九頁。
- (九) 本来は『工藝』第四九、五〇、五四号（昭和十年一、二、六月）に掲載された文章。その後幾度も大改訂を経て私家版の構成をとる。
- (十) 『茶道を想ふ』（私家版、昭和十一年）、『全集』十七、一九三頁。
- (十一) 同上。なお、この文章での「ぢか」という仮名遣いは、私家版を底本とした全集には「じか」で収められている。しかし、『柳宗悦選集第六卷・茶と美』（春秋社、昭和三十年）所収のものは「ぢか」とあり、他の文章とも統一するためここでは

「ぢか」の仮名遣いに変えて引用した。

(十二) 『茶道を想ふ』、『全集』十七、一九四頁。

(十三) 『見ること』と『知ること』、『工藝』第一〇二号(昭和十五年三月)、『全集』九、二〇九―二一〇頁。なお、他に初期の例

としては例えば、「即如」、『白樺』第九卷、第一号(大正七年、一月)、『宗教とその真理』に類似の表現(『全集』二、一六七頁)がある。また晩年にも「茶人の資格」、『民藝』第三九号(昭和三年三月)にほぼ同内容の一節(『全集』十七、六一頁)がある。

(十四) 『即如』、『全集』二、一六七頁。

(十五) 「作物の後半生」、『全集』八、五二三―五二四頁。

(十六) 「買物」、『民藝』第七三号(昭和三四年九月)、『全集』十六、六九八頁。

(十七) 『工藝文化』(文藝春秋社、昭和十七年)、『全集』九、三五一頁。

(十八) 同上。

(十九) 『見ること』と『知ること』、『全集』九、二〇八頁。

(二〇) 『茶道を想ふ』、『全集』十七、二〇三頁。

(二一) 『工藝文化』、『全集』九、三五二頁。

(二二) 「私の念願」、『全集』八、五四七頁。

(二三) 同上。

(二四) 『美の浄土』、『全集』十八、二三九頁。

(二五) 「作物の後半生」、『全集』八、五二二頁。

- (二六) 『茶道を想ふ』、『全集』十七、一九四頁。
- (二七) 「私の念願」、『全集』八、五四七頁。
- (二八) 「日本の眼」、『心』第十卷第十二号(昭和三十三年十二月)、『全集』十七、四三四頁。
- (二九) 「茶道を想ふ』、『全集』十七、一九四頁。
- (三〇) 『茶道を想ふ』、『全集』十七、一九五頁。
- (三一) 同上、二〇四頁。
- (三二) 「私の念願」、『全集』八、五四九頁。他にも例えば、「見るものと使ふもの」、『阪急美術』第八号(阪急百貨店、昭和十三年五月)にも「使ふと云ふのは・・・生活と美とを結ぶ意味である。生活で美を味ふと云つてもいゝ」、『全集』九、一五九頁とあるなど類例は極めて多い。
- (三三) 『工藝文化』、『全集』九、五〇三頁。
- (三四) 「美と生活」(放送原稿、昭和六年)、『全集』十、四二四頁。
- (三五) 「哲学的至上要求としての實在」、『全集』二、一三三四頁。
- (三六) 『もの』と『こと』、『工藝』第九三号(昭和十四年二月)、『全集』九、一七一頁。
- (三七) 『茶道を想ふ』、『全集』十七、一九六頁。
- (三八) 「見るものと使ふもの」、『全集』九、一六二頁。
- (三九) 濱田庄司「柳宗悦の『眼』」、『民藝』第一〇二号―特輯柳宗悦を悼む―(昭和三十六年六月)、十八頁。
- (四〇) 「作物の後半生」、『全集』八、五二六頁。
- (四一) 「私の念願」、『全集』八、五四九頁。

- (四二) 『工藝の道』(ぐろりあそさえて、昭和三年)、『全集』八、八〇頁。
- (四三) 「見るものと使ふもの」、『全集』九、一五九頁。
- (四四) 「九州大会への御挨拶」、『民藝』第一〇二号―特輯柳宗悦を悼む―に遺稿として掲載、『全集』十九、八六八頁。
- (四五) 「買物」、『全集』十六、六九六―六九七頁。
- (四六) 同上、六九七頁。